様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2016
課題番号：２４５３０７０１

研究課題名（和文）先進国における「社会開発志向コミュニティワーク」モデルの模索：日米の事例研究

研究課題名（英文）Towards Developing Social Development-Oriented Community Work Model: Case Examples from Japan and US

研究代表者
稲葉　美由紀（Inaba, Miyuki）

九州大学・言語文化研究院・准教授

研究者番号：４０３２６４７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：私たちの日常生活は自然災害、新たなテクノロジーやグローバル化の影響を受けている一方で、様々なリソースは減少しています。そのような状況を背景に、本研究は貧困や格差の問題が深刻化している「豊かな国」において、従来の救済的・治療的な社会福祉の枠組を超えた社会開発的なコミュニティワークモデルづくりへの手がかりを模索することを目的とした。社会開発的なアプローチとして、社会企業・ソーシャルビジネス、少額融資、コミュニティガーデン、認知症カフェなどの地域を基盤とした新たな活動が展開されていることを確認することができた。研究成果は日本社会福祉学会などを含む国内外学会で発表し、論文として出版した。

研究成果の概要（英文）：Our lives are being affected by many conditions, including natural disasters, new technologies, and globalization; and resources are becoming scarcer. With these rapid changes, poverty and disparity in income, assets, education and health have been widening in developed countries. In this research, the need to increase the social development oriented practice and strategies for community work is explored in Japan and the US. Case examples of social business, community gardening, and dementia cafe are identified and examined how these programs contribute to improving the well-being of individuals, groups, and communities. The research findings were presented at professional conferences such as the Japanese Society for the Study of Social Welfare and SWSD Joint World Conference for Social Work, Education and Social Development. Papers were published both in Japanese and English including the Journal of Gerontological Social Work.

研究分野：社会福祉学

キーワード：社会開発　コミュニティワーク　社会福祉　貧困・格差　エンパワーメント　アメリカ　日本

１．研究開始当初の背景

貧困は従来開発途上国の文脈で考えられていたが、近年では豊かな国の問題でもある。先進国における貧困者の増大や所得・資産の格差の拡大の原因として、病気、失業、多重負債、離婚、事故など貧困リスクは多様に存在し、それは日常生活と密接に関連している。貧困の構図は多元化し複雑になっている。アメリカや日本において社会保障（セーフティネット）は財政的にも支援の幅（職業訓練、住宅、育児・介護など）をみても決して十分と言えない状況であり、特にアメリカにおいて国の富は不平等に分配されている。ネオリベラルな経済政策が問題であると指摘されていると同時に、グローバル化は労働市場や産業構造を大きく変化させ、多様な雇用体系を生み出すとともに「適切な賃金」を得る就労機会を減少させてきたといえる。先進諸国においても貧困者、ニート、ワーキングプア及びホームレスの増加など共通する問題を抱えており、持続性のある貧困（予防）対策やセーフティネットの構築が必要である。貧困対策は、貧困者のためだけではなくいつ貧困に陥るかわからないすべての人々、そして安定した社会を築くために不可欠である。途上国の場合、早期から就労創出のプログラムが福祉の向上と連携させ実施されているが、先進国においても貧困が多くの問題の根底に存在している。一方では経済不況から社会保障および社会福祉への財源が危ぶまれる状況もあり、社会開発志向の多様な活動が求められている。

研究の学術的背景

アメリカのコミュニティワーク（CW）の研究分野では定藤（1979, 1988）が、地域社会の社会福祉問題とソーシャルワーク実践及びコミュニティ・オーガニゼーションの実践と理論の展開に関する研究を通して、日本における CW モデルを構築する必要性を論じている。現在、日本の CW 研究は、高齢者在宅ケアを柱としたコミュニティの社会システムの構築及び地域福祉の促進のためのコミュニティ・ソーシャルワークの機能、役割及び方法論についての議論が展開されている（平野, 2003; 牧里,2002; 大橋,2001）。このように「地域福祉」の文脈において CW の研究は進んでいるものの、理論及び実践方法に関する研究はまだ数少なく、CW と雇用・収入創出等の経済活動をリンクさせた研究はほとんど存在していない。

一方、アメリカでは、マイノリティや貧困地域等の対象グループに対してエンパワーメント志向型のソーシャルワーク実践方法が模索されている（Cox,2000；Lee,1994）。また、社会開発（経済開発のダイナミックな課程と国民全体の福祉を促進するように企てられた計画的な社会変革）視点からの貧困撲滅、社会統合、完全雇用に焦点をあてた新たなソーシャルワークのあり方について議論されている（Midgley, 1994）。この 3 点は 1995 年に開催された国連社会開発サミットにて重要性が確認された。さらに、グローバル時代に求められるコミュニティワークの８つの実践モデルの研究は進められているが(Weil & Gamble, 2005)、CW と経済活動の実践モデルについては十分に研究が蓄積されていない状況である。

２．研究の目的

近年、先進国においても貧困増加と格差拡大が確実に進んでおり、その背景にはグローバル化による産業構造や雇用体系の変化、ネオリベラルな経済政策や高齢化など政治経済社会的な要因が「新しい貧困」を生み出している。インフォーマル・セクターが制度上存在しない先進国においてこのような生活基盤を喪失した人々を対象に、基本的ニーズの充足と収入および雇用機会を提供する新たな取り組み・モデルを構築することが大きな課題である。この問題意識から、本研究では日米における「社会福祉」と地域内の社会資源を活用した「経済活動」の両側面に焦点を当てた取り組みを事例として調査し、その現状と課題をコミュニティワークとの関連で分析することによって、先進国における「社会開発志向のコミュニティワークモデル」の構築を目的とする。

３．研究の方法

研究開始当初は、先進国の事例として日本とアメリカを考えていたが、ソーシャルビジネスを通して貧困問題を解消する事業として、日本からフィリピンの貧困問題に取り組みながら、同時に日本の福祉問題に関わっているプログラム等についても調査対象地域を広げることとした。

初年度は、日本において収入創出に関わるソーシャルビジネスや社会開発的な観点からの新しい取り組みに該当する事例を整理し、その中でもグッドプラクティスと考えられる取り組みについてのセミナーや講演会などに参加し情報収集を行なった。次年度は、初年度の先行研究を踏まえて、新たな貧困者が急増している状況を背景に雇用創出と生活の質の向上を連携させたプログラムが模索されている中、最近国際機関(ILO、国連社会開発研究所など)が研究対象として取り上げている「社会的連帯経済」という新しい経済や社会を構築する方法として使われている概念と社会開発の関係を明らかにすることを試みた。その後、アメリカにおける研究

課題に関係する事例について現地調査をコロラド州とニューメキシコ州において行った。最終年度においては、これまでの研究成果を国内外の学会や会議において発表すると同時に論文（日本語と英語）を投稿した。特に、Journal of Gerontological Social Work の特集号“Neighborhoods and Communities: Focus on Community Development”に出版することを通して、日本における研究課題について出版できた。

研究体制としては、研究の遅れを取り戻すために 4 年目から社会福祉と社会開発分野（特に障害と貧困）の研究分担者を追加し、限られた期間内に研究が進められる体制に移行した。

４．研究成果

本研究での活動内容は大きく分けて、①従来の枠組みを超えたコミュニティーワークの活動内容、福祉と他分野の連携活動、新しい枠組みに関する概念に関する文献調査、②国内外でのフィールドワークに分類できる。

（１）豊かな国々においても従来の社会福祉の制度の狭間に置き去りにされている人々（貧困層、障害を持つ人、認知症の高齢者、引きこもり、ひとり親世帯、外国人など）が増えている状況であり、社会福祉の多様なニーズとフォーマル及びインフォーマルなサービスをつなげるだけでは対応しきれていない人々が存在することが課題であることを確認し、どのような予防的・開発的なコミュニティワークが展開されているかについて調査したところ、社会福祉分野の枠を超えた社会開発の視点からの取り組みが展開されていることが明らかになった。

（２）貧困者の自立支援を目的とする社会企業・ソーシャルビジネスや少額融資のアプローチ（杉野・稲葉、2016）、貧困者が経済的に自立するために生活面などのサポートを受けながら KAS(知識、姿勢、スキル)を提供するプログラム、コミュニティガーデンという取り組みでは地域が抱える多様な課題について園芸活動を通して改善していこうという活動なども確認された（稲葉、2014、2016）。特に、社会企業の事例ではフィリピンの活動が日本の福祉課題の解決に寄与するという、これまでに例を見ない途上国から日本への逆パターンの国際協力の例を見出すことができた。この点については今後の研究課題としたい。

（３）社会福祉の課題が多様化・複雑化するニーズに対して従来のようにフォーマルサービス及び地域内のインフォーマルサービスを把握し、対象者へつなげることは重要であると同時に、コミュニティワーカーには社会開発及び社会投資、エンパワーメント、ストレングスの視点（稲葉、2013; Inaba, 2016）から他分野（農業、アート、教育など）との連携を通して個人、グループ、地域の生活の質を向上されるような新しい事業企画やイノベーションを模索していくことの重要性が確認された。コミュニティワーカーは、ターゲットの弱点（問題に焦点を当てる医学モデル的アプローチ）よりも、むしろストレングスに着目し、成長の可能生引き出しながら支援するためのエンパワーメント、意識化、能力強化、権利ベース、インクルージョンを実践の中心的概念におきながらコミュニティ力を高めることが必要である。

（４）本研究では当初の課題に十分こたえられているとは言えないが、従来の社会福祉のアプローチの枠を超えて社会福祉の対象者に対して、社会福祉研究と社会開発及び地域開発を統合する試みとして、支援を受ける人のベーシックヒューマンニーズ(BHN)の充足と生活の質向上に向けて個人、グループ、地域、そして社会変革へとつなぐエンパワーメント実践をどのように発展させることができるか、ビジネスの CSR や社会企業などとの連携にさらに着目し、持続可能な開発目標の達成に向けた豊かな国における新しい福祉向上を目指したアプローチの模索を今後の研究課題として進めていきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　10　件）

① 稲葉美由紀、「高齢者介護とジェンダー–エンパワーメント実践の意義」、『言語文化研究』、査読有、38、2017,73-84

② Miyuki Inaba, “Aging and Elder Care in Japan: A Call for Empowerment-Oriented Community Development”, *Journal of Gerontological Social Work*,査読有, 59 (7/8),2016, 587-603 http://dx.doi.org/10.1080/01634372.2016.1258023

③ Faisal Ahmed, Tahmina Islam, Golam Mathbor, & Miyuki Inaba, “Elderly People among the Patra Ethnic Group in Bangladesh: A Qualitative Study”, *Studies in Languages and Cultures*、査読有、37、2016,51-61

④ 杉野寿子、稲葉美由紀、「フィリピンの貧困と社会開発的アプロ–チーあるソーシャルビジネスの取り組みから」、『地域福祉サイエンス』、査読有、3、2016、163-171

⑤ Miyuki Inaba, “Policy and Services for the Elderly in Japan: The Need to Build Social Capital Intervention Strategies”, *Studies in Languages and Cultures*、査読有、35、2015,103-112

⑥ 稲葉美由紀、「アメリカの貧困問題と社会福祉−母子世帯への開発的福祉の取り組みに関する一考察」、『言語文化論究』、査読有、32、2014,71-90

⑦ 稲葉美由紀、「ソーシャルワークと社会開発−開発型ソーシャルワークの理論と実践」、『言語文化論究』、査読無、30、2013、159-179

⑧ 稲葉美由紀、「アメリカの拡大する貧困と格差−資産格差と医療費負担の視点から」、『言語文化論究』、査読有、28、2012、87-104

〔学会発表〕（計　6　件）

① Miyuki Inaba, Late Life, The Joint World Conference on Social Work, Education, and Social Development, 2016 年 6 月 28 日、COEX Convention & Exhibition Center,ソウル（韓国）

② 杉野寿子・稲葉美由紀、フィリピンの貧困と社会開発的アプローチーあるソーシャルビジネスの取り組みから、日本社会福祉学会九州地域部会第 57 回研究大会口頭発表、2016 年 6 月 19 日、長崎ウエスレアン大学（長崎県・諫早市）

③ 稲葉美由紀、高齢化におけるチャレンジ−要介護高齢者の大切な役割、第 1 回 Working Women in an Ageing Society、2016 年 6 月 5 日、福岡コンベンションセンター（福岡県・福岡市）

④ Miyuki Inaba, Building Community Capacity Through Dementia Care: A Case Study of Omuta City, Round Table on Aging and Social Security, 2015 年 12 月 17 日,Center for Development Studies（開発研究所），トリバンドラム，ケララ（インド）

⑤ 稲葉美由紀、開発途上国から学ぶ国際社会福祉−貧困問題と開発型ソーシャルワーク、日本社会福祉学会第 61 回秋季大会、2014 年 9 月 21 日、北星学園大学（北海道・札幌市）

⑥ Miyuki Inaba, Elderly Care Issues in Japan: Community-Based Empowerment interventions, JSPS-NRCT Seminar at Research Expo 2013, 2013 年 8 月 25 日、Bangkok Convention Centre at Central World, バンコク（タイ）

〔図書〕（計　3　件）

① 石井有希子編著、稲葉美由紀他 14 名、ナカニシヤ出版、「豊かな国のなかの貧困−アメリカにおける貧困とグラミン・アメリカ」『国際社会学入門』、2017,177(153-163)

② 宇佐見耕一他 3 名編、稲葉美由紀他、旬報社、「女性エンパワーメントセンター福岡」『2014 世界の社会福祉年鑑』、2014, 514(467-484)

③ 川池智子（編）、稲葉美由紀他、学文社、「アメリカの社会保障・社会福祉」『新社会福祉論−基本と事例（社会福祉の新潮流）』、2012、298(178-190)

６．研究組織

(1)研究代表者
稲葉　美由紀（INABA, Miyuki）
九州代学大学院言語文化研究院・准教授
研究者番号：４０３２６４７６

(2)研究分担者（H26-H28）
杉野　寿子（SUGINO, Hisako）
福岡県立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：３０４１２３７３